



作家・ドイツ在住 川口マーン恵美

和気あいあいの楽しい集い

去る6月18日は、日本在外企業協会(以下・日外協)の創立50周年の祝賀パーティーだった。招待していただいた客の1人として感想を述べさせてもらおうと、盛会で、かつ、和気あいあいの楽しい集いだった。また、出席していた方々の間に、想像していた以上のネットワークが感じられ、門外漢の私としては極めて新鮮だった。ちなみに私と日外協との関わりは、いうまでもなく本コラムで、21年3月号からのお付き合いだ。

インターネットという便利なものが仕事道具のスタンダードになって以来、出版界では、編集者と著者が顔を合わせる事があまりなくなった。電話で声を聞くことはもったない。

執筆の最初は、たいてい知り合いからメールで、「〇〇さんという人が連絡したいといっています、メールアドレスを知らせてもいいですか?」というような連絡が入り、「どうぞ」というと、〇〇さんからメールが届き、原稿の依頼や、時には連載の話が来る。

連載では、編集者とは原稿のやり取りで定期的にメールの発信があるが、極端な場合、何年も仕事をしながら、編集者と顔を合わせることもない。しかも、そのまま連載が終わってしまったケースさえ、私の場合、2~3回あった。

ただ、編集者と著者というのは会ったことがなくても、毎回のメールに付けられたちょっとしたコメントで、なんとなく親しみを感じる関係となるケースもある。その場合、次第に想像

が膨らみ、頭の中に私の「〇〇さん」が出来上がってくる。そういえば1度だけ、編集者の名前が「ケイ」で、男性か女性かが分からず、想像できず困ったことがあった(その後、会ったら、ケイさんは若くて元気な女性だった)。

『月刊グローバル経営』では、昨年、私の講演会を企画してくださったので、その時初めて、毎月メールを交換している須藤編集長や、スタッフの方々にお目にかかった。私の想像していた須藤さん像は、まじめでスラっとしていたので、かなり“当たり”だったと思う。いずれにしても、編集者と著者はやはり1度は会っておく方が、仕事はスムーズにいく気がする。私の場合、そうして本当に親しくなった編集者も何人かあり、信頼できる友人が増えたようなありがたいプラスアルファだ。

ちっとも平和にならなかった世界

話をパーティーに戻すと、50年という年月が私の心に迫ってきた。若い人なら生まれる前の話だ。私はもちろん生まれてはいたが、しかし、まだ日本から一歩も足を踏み出したことがなかった。初めての外国旅行が43年前で、1人でアエロフロートというソ連の飛行機に乗り、モスクワで乗り換えてロンドンに飛んだ。そこからドイツ、イタリア、オーストリアと、今考えたら信じられないような大冒険をした。若いというのはすごいことだと、我ながら思う。

アエロフロートに乗ったのは単に安くて早かったからだ。当時は冷戦の真っ最中。その他の西側の飛行機はソ連上空を飛べなかった。